震災特集

過去からの予言

～震災にあたっての歴史学からの所感～

芳賀　満[1)*]

1）東北大学高等教育開発推進センター

Ⅰ．歴史学の本懐

災害に遭遇し，先ず生命の確保とその維持が必要であった．そして平時にもまして復興の為に，国家の基本としての警察・軍隊が機能し，科学と技術が災害の現象を見極めその原因を究明し，そのような「実学」の成果の機械や機器が活躍した．法学，政治学，経済学も共同体の復興と維持に当然不可欠であった．然るに人文社会科学，特に歴史学の意義は何であろうか．遭難し自分の生業を考えざるを得ない．

それは言ってしまえば，夏炉冬扇である．常に時季外れの余分の不必要かもしれぬ．業の肯定や不条理の解毒の作用を，一時であれもたらす笑いやエロスほどの意味もないかもしれない．

しかし人間は，情報的，精神的，情動の存在である．他人と情で繋がってはじめて生きてゆける存在である．自分の余命を知って見上げる花は，寸前までの桜とは異なる．「花は散りてその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる」（式子内親王），花が散った後の虚空にさえ心は何かを見る．心が体を凌駕することもある．

人間だけが仲間の死体を埋葬する．人間の死体のみが他の生物の食料に供されることはない．しかしそれは未来の仲間の人間の精神的な糧となる．そのような過去の人間の精神的な摂食・嚥下の作法を歴史学と呼ぶ．ゆえに「人は人に忘れられた時に死ぬ」（『ONE PIECE』大意）が，その生死に意義を認め，忘れなければ決して死なない．

その為に我々は因果律を信じつつ過去から未来への不可逆的な時間の流れを歴史概念成立の基本条件として設定し，それに目盛を刻み暦を創った．「去年今年貫く棒の如きもの」（虚子）とは，天然自然の奔流の如き強さと共に，それを貫く暦という人間文明の意志の強さを言う．

荻生徂徠が「学問は歴史に極まり候事ニ候」（『答問書』）と述べるのは，人間をとりまくあらゆる事象の奔流が，最終的には常に現在に流れ込み，歴史学によって嚥下され解釈されるからである．確かに強くなければ生きてゆけないが，優しくなければ人間として生きてゆく資格がない．歴史学はそういうものだと，カッコつけて嘯きたい．

Ⅱ．過去相対化の射程ごとに

では歴史学からみたら，この度の地震・津波と原発事故はどのように捉えることができるだろうか．それは対象であるこの天災・人災や人間と，どれほど距離を置くか，どれほど突き放した相対化の視点を設定するかによって異なる．

600万年前にヒトが発生したが，それを越える数億年から46億年を一望する視点を設定するならば，レヴィ＝ストロースの言う「世界は人間なしに始まったし，人間なしに終わるだろう」（川田順造訳『悲しき熱帯』中央公論新社）との達観が真実であろう．今世紀の警句としてこれほど相応しいものはないが，これほど冷徹なペシミストの巨人に私はなれない．

600万年程を一望するならば，そこには様々なヒトが存在し，多くの場合同時に複数の種類のヒトが存在

*）連絡先：〒980－8576　宮城県仙台市青葉区川内41　東北大学高等教育開発推進センター　mhaga@m.tohoku.ac.jp

し，あるものは途絶え，あるものは存続したが袋小路に入り，あるものは生き延びてきたことがわかる．このような人類交替劇の視点から見れば，我々だけが特殊であるはずもなく，我々もいつか交代され，吸収されるかあるいは消えてゆく存在であることえを悟る．

そのような中で既にネアンデルタール人は死者を埋葬し花を手向けた．人類は天国という精神装置を発明したのである．我々はやさしい．ろくでもない奴らかもしれないが，やさしいのが我々の特長だ．

20万年前から，現在のところ最後の人類交代劇である７万～２万２千年前頃のネアンデルタールと我々を視野に入れれば，後者が生き延びて繁栄した理由の一つは，未開拓の分野への進出が積極的で，石器のセットの頻繁な改良から判るように何回も限界を突破して科学技術の革新に邁進したからである．我々の現代の繁栄をもたらした科学のプラスの側面が見えてくる．

１万年程前から，人間が環境に対して強く働きかけて食料を得る，農業と言う環境技術が始まった．人類による精神上の最大の発明が「天国」であるとしたら，技術上の最大のものは「農業」である．それによって一度人口が増えると，もはや農業なしの段階には人類は戻ることはできない．食料の貯蔵と調理の為の土器の発明から，産業革命，原発に至るまでの利便性の追求は，囓った林檎の如く後戻りし難い道程であった．環境に非常な負荷を強る技術である点で，農業は原発と同じである．押し並べて人類あるいは文明とは環境に負担をかける存在なのである．

そしてシュメル文明は，人工灌漑技術による農業で繁栄したが，それによる塩害で滅亡した．文明の繁栄の原因が滅亡の原因であった．つまり，爾来人類は「文明災」（梅原猛氏による概念）として原発事故の来る日を知っていた．３月11日の震災は，古代から我々が我々に隠していたことを露わにしただけである．今般の大災害は『予告された殺人の記録』（G．ガルシア＝マルケス）なのである．殺人の物語はあの日に始まったのではなく，遙か昔から始まっていたのである．

まして石器時代の技術革新とは異なる現代は，トランス・サイエンスの時代に突入し，科学・技術が社会と不可分であるリスクを負った世界である．どこかに祝祭的で自虐的な期待感さえあったのではないだろうか．でなければ，炉心溶融したのは我々の愚かさである．

なぜなら既にバビロニアの酌婦が，森を破壊し永遠の命を求めて冒険を重ねるギルガメシュに言う．「あなたはどこまでさまよい行くのです／あなたが求める生命は見つかることがないでしょう／（そうではなく，死を悟り，そして）／あなたの手につかまる子供たちをかわいがり／あなたの腕に抱かれる妻を喜ばせなさい／それが人間がなすべきことだからです」（矢島文夫訳ちくま学芸文庫）．

古代ローマ帝国とは，古代の最終形態である．それは古代という長い時代の総決算としての社会である．その後，西ローマ帝国の滅亡により中世に突入し，近代・現代へ続くが，それは古代以降の時代の延長であり，その後の我々は未だに中世以降の総決算ないし結末には至っていない．であるから古代ローマはモデルとして検討するのに未だに有効であるのだが，それはいささか西洋中心史観であるかもしれない．

そのようなとき，我々の江戸時代は，西洋では果たせなかった，中世以降の世界史のひとつの結論を示す時代ではなかったろうか．少なくともそのようなものが，18世紀の京都の片隅では熟成されつつあったのではないだろうか．「桃源の路次の細さよ冬ごもり」,「うづみ火や我がかくれ家も雪の中」,「うづみ火や終には煮ゆる鍋のもの」（蕪村）．都の片隅の細い路次の奥の棲家の火桶の炭の中の埋火というように，より深く温かい内部へ収斂し引き籠もり居る，同時に温かい埋み火を中心に宇宙が広がる，そのように豊かでほの暖かく，人間の身の丈に合った親密な安息の世界．しかし熟れかけていた桃源郷の夢も，米欧の進出によってやぶれる．

谷崎潤一郎も「もし東洋に西洋とは全然別箇の，独自の科学文明が発達していたならば，どんなにわれ々の社会の有様が今日とは違ったものになっていたであろうか」（『陰翳礼讃』）と嘆く．今はこれを「小説家の夢想」とすることなく，あらためて「東洋は東洋で別箇の乾坤を打開」することを試みるべきではないだろうか．

Ⅲ．未来から現在を観る

一般に上の世代が下の世代の犠牲になることに何ら問題はない．子供を生み育てることが既に親の愉悦に満ちた犠牲である．だが逆に下の世代に拭えない犠牲を強いることは真の世代間格差である．放射性物質はこれを永代にDNAに強いる．

それは現在において未来の死者が予告され出ていることである．それはかつて歴史学が扱ったことはなく扱えるものではない．未だ埋葬も済ませていない未来の死者をどう扱えというのか．しかし今は，逆照射の歴史学として，未来から現在を観るべきではないだろうか．

するとCreativityだけでなく，Generativityこそが重要である（公共哲学共働研究所金泰昌氏の提言）．前者「創造性」は，一世代のみを視野においた考え方であり，所有権を主張し権利を要求するが，その結果の責任は取らない．一方，東洋的考え方である後者「世代継承生成性」は，一世代を超える視野を特徴とし，権利を要求はしないが，責任を負う考え方である．

そもそも教育とはそのような行為だ．今回の災害を，我々が未来に恥じない今を生きはじめる機会としたい．